

---

# 引きこもりと少女の冒険譚

ひらきなある

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

引きこもりと少女の冒険譚

### 【著者名】

Z9232S

### 【あらすじ】 ひらきなおる

弓をこもつと少女が異世界で冒険しますー以上ですーこれ以上言つことないですーばーかばーか！

「おれの基準は家から出ないんだから、あいつだな（前編）

別に悪いことや！

「さき」もりの基準は家から出なことと云ふことでありますだいね

世の中には数え切れないほど不思議なことが起きる

これは小生が経験した不思議なことの一端である

話は數十年前に遡る。小生の家はそれなりに大きかった、町で六番  
目くらいに大きかった。

当然家が大きいということはそれなりの地位が親にあると言う事で  
比較的恵まれた生まれだった、小生には姉が一人、兄が一人、妹が  
一人という一般家庭と比べたらやや多めの兄弟がいた。

姉は頭脳明晰、沈着冷静、立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花。

兄はと言つと運動神経抜群、顔もそこんじょそこらのモデルよか整  
つた顔をしており、学校にファンクラブまでいる始末である。

妹もやはり俗に言つ美幼女で、年にしては非常に聰明である、しか  
しながら時間があれば小生に嫌がらせするのはやめていただきたい、  
この前鋏はさみが前後左右から飛んできたのには肝が冷えた、そういえば  
三日前も

### 閑話休題

では、小生の自己紹介をしておこう、小生は小学校で暑苦しい（し

かしながら頭のほうは寒々しい）校長先生に「もう来ないでくれ」と涙ながらに頼まれ、それ以来この年まで家の図書館で要らぬ知識をつけ続けていた（）出してでも恥ずかしい引きこもりの青年である。

とは言え小生は普通の引きこもりになるつもりなど毛頭無く、朝は五時に起床し、起き抜けに息絶える寸前まで走りこみ、昼食を食べた後に今度は浴に詰つ筋トレを五時間、それが終われば図書館に引きこもりひたすら本を読むと言つ充実した生活を送っている。

親はこの様子を見て「こぞとなつたら自衛隊にぶち込んでやれば良い」などとほざいている様だが、小生は上下関係というものが非常に好むところではないのでこぞとなれば成績優秀な姉か兄の脛をかじつて生きてこいつもつであった。

そんな筋肉モリモリ、マッチョマンの変態の小生（実はそれほどマッチョではない）に転機が訪れたのが妹が小学五年生になり、小生が十八になつたことであった。

その日は早めに自己鍛錬を切り上げ図書館で本を見ていたときであつた、尿意を催したので廁に行こうと図書館の扉を開くとそこには雪ぐら……ではなく草原が広がっていた。

また妹の仕業かと思い、呼んでみる所とした

「おこ、妹よこればビツコウ」とだ

「私もこれに関しては身に覚えが無いよー」

と言ひながら床下から這い出でてくる妹、どこから出でて来ているんで  
しそうかこの小娘

「そりは言つても交友関係の少ない僕にはこんなことをする奴はお  
前以外に思いつかん」

「さすがに私でもこんなことする技術は無いよー」

うーむ、それでは自然現象とか、うつそでー  
少し取り乱したがやはり現実のようである、妹のふにふにしたほつ  
ぺたを引っ張ると「いふあいいふあい」と言つていたしな。

「僕の見た文献だとこの先はファンタジーでマジカルでリリカルな  
世界に繋がってる可能性が非常に高い」

「じゃあ、そつそと準備して行こつよー」

準備と言つたら何だ、とつあえず金田のものを持って行くことにす  
る、どうせ家のものの一つや二つなんぞ無くなつたところで誰も気  
にかけまい。そして必要最低限のものをバックパックに入れ、準  
備ができたと腰を上げ妹が帰つてこないうちでせつと行くことこ  
しよつとあると

「先に行こうとなんかしてないよねー?」

「クソがツツー。」

思わず吐き捨ててしまった

「なんだかう二つ」とあるかなー。」

「お前には未来がある、お前の将来を僕は壊したくないんだよ。」

と由を切って妹思いの兄を演じるとしてする

「やの将来を決めるのは自分なんだから問題ないでしょー。」

「ぬかしある

これ以上問答をしたところで埒あわがあかないのと記念すべき一步を踏み出すこととする。

「まじめのこと。やめこと。」

妹が小生を突き飛ばし俺は草原に顔からダイブした、記念すべき第一歩は顔面から、ところどころなったコノウラミハラサデオクベキ力

「おじいちゃんの基準は家から出なことだよ」と（後輩）

兄や姉はいいのか、そのうちは世界をもじらねいかないがいい  
うか、もつ飽きたまました塩辛いものが食べたい

せつとうのつかひだへ（温帶化）

ハイカウニシナメイギル

## せひめのつやくだつ

はてさて、妹と小生はこのよひに異世界に降り立つことに相成ったわけだが我々が通り過ぎると扉は見えなくなつた、きちんと準備しておいて良かったと言えよつ。

それにしてもこの小娘リヤカーマで持つてきて用意周到にも程がある。

「自分で引いていくよ」

「わかつてるよー」

意外にも素直に聞き入れた、もつ少し行ねると思つたが

「でも戦闘要員はお兄ちゃんだからねー」

「ぬかしある」

万が一戦闘になつたらこいつを囮にして逃げるつもりだ、この顔面の痛みのツケは大きいぞ……

2時間ほど歩いていると村が見えた、見えたのだが……

「ひいい……助けて……助けてくれええええ……」

「嫌だあ！死にたくないいっ……」

「畜生ッ！このまま死ぬのか！」

どう見ても修羅場です本当にありがとうございました。

とりあえず目立つリヤカーから離れ、伏せの状態で様子を見る」とにする、どうやら化け物に襲われているようだ、それこそファンタジー小説等に登場するゴブリンのような見た目である。

さてこのゴブリンども、見た感じ非常に数が多い、一匹一匹は貧弱そうだが三匹以上に囮まれて棍棒で滅多打ちにされたら歯が立たなさそうだ。

そのゴブリンが約十五匹いて、村人の戦闘要員はおよそ五人、こうして見ると均衡しているように見えるが男たちは逃げ腰で、しかもゴブリンは一人に対して五匹が集まっているので、これではあまり持たないだろうと判断した。

「助けに行かないのー？」

「村人を全滅させた後で疲れたゴブリンどもに奇襲を仕掛けるというのが現実的な策だな」

「外道だねー」

「具体的にどういふのー？」

「具体的にどういふのー？」

決まっている

「スニーキングミッションだ」（ドヤ顔）

戦闘に勝利したゴブリンは生き残りを探すために戦力を分散する、そこを狙い一匹ずつ確実に暗殺していく。

「勇者とは程遠いねー」

元より勇者になるつもりなど無い、そういうのは姉や兄のような人物に任せたければいい、卑怯？これは戦略と言つものだ。

そうして数を減らしていくこと數十分、ようやくゴブリンも異常に気づいたようだ、このときゴブリン残り二匹、あまりにもお粗末な頭脳である。

「十一匹も仲間が減つて今気づくとか残念すぎるだろ」

「いやうりとしてはありがたいけどねー」

しかし残り三匹とは言え油断は禁物、何が起こるかわからないのが実戦である。生き残りを全員殺してもらわないと略だ……もとい戦利品調達の際の目撃者がいなくて済む。

「悪だねー」

「何を諦める必要がある、奪い取れえ！今は悪魔が微笑む時代なんだ」

「す、」<sup>1</sup>似合つてゐよなー」

お前はさしづめアミバといったところか、と言つと間違いなく刃物が飛んでくるのでやめておくさて、村人が全滅したようなので心置きなくゴブリンどもをSAT SUGA Eできる。

「罪無き村人たちの敵だー」

「黙つてみてた僕らが言えたことじや あないと思つが

そう言いながら家の屋根から植木鉢や壺をゴブリンの頭をめがけて投げ落とす、ゴブリンどもが小生たちの姿に気づくが時既に時間切

れ、脳漿を撒き散らしながら奴らは死んだ、「ゴブーリ（魔物）」をつたね

それからの泥棒タイムだったが、どうやらこの村かなり農業で儲けてたようでかなりの額が手に入った、ついでにいくつか簡単そうな絵本や歴史書、数学の教科書のようなものを頂いてきた。

「いつこいつのものは勉強しておかないと厄介になるからな。

まじめのこちゃん（後書き）

設定を考えるの面倒くさいです、魔法とかいつ出てくるか自分でわ  
かんないです、行き当たりばったり過ぎて嫌になっちゃうね

ふあーかといじたべと（繪書も）

GW中なので時間があつすぎて困る

## ふあーすとこんたくと

この世界の硬貨は、銅貨百万枚＝銀貨一万枚＝金貨百枚＝白金貨一枚と百枚ごとにグレードアップするらしい、わかりやすく安心した。

さてこの村から略奪した硬貨はおおよそ金貨五十枚分、殆どが銅貨と銀貨だった、わかりやすくりんご換算にするどりんご一個＝銅貨一枚なので実に約りんご五十万個分ということになる。

こうして無一文から一転、大富豪になった小生達ではあったが、町が見つからないことには使い道がない。

とこうわけで村から出る」とこした。

しーあわせはーあーるいってこーないーだーかーら奪い取りに行くんですよー

歩きながらこの世界について本から（字は読めなかつたので繪本等から分析しつつ）読み取つたことを説明しようと思つ。

まずこの周辺は仮にA地域としておこう、A地域には魔物はさほどおりず、比較的安全な地域である。A地域の特徴としてはだだつ広い草原、安定した気候、農作業や酪農に適した土等人が住むのにな常に適しているということだろつ。当分はこの周辺で人を探すようこしようと思つてこる。

次にB地域、ここでは森があり多くの魔物や化け物がいるらしい、しかしここには森には大抵エルフがいるものである、十分装備を固めたらこれからの方にも足を向けようと思つ。

最後にC地域、とはいつたもののC地域はB地域の深い森を抜け、さらにその先の砂漠を越えなければいけないため未開の地とされている。説明したからにはいつかは行くことになるのだろうが、はてさて何時のことになるやらわかつたもんじやない

と、まあこのような感じになつてゐる。小生説明お疲れ様です！か  
つじいぜ小生！

「ねーねー」

「ああん？ 何だ小娘」

「あそこ馬車があるよー」

そちらを見るとなるほど、馬車が止まつてゐる。

「不用意に近づくのは危険だらつ、少し様子を見るぞ」

「つょーかーい」

身を低くして様子を伺う、見たところ女が一人男が三人程度、装備

品もひやんとしているし、おそれく賊の類ではなく旅人のよつなのだらう。

手を大きく上げながら声をかける」とする、村では悲鳴も認識できたらしいから言語も理解できるだらう。

「すいませーん！」

「ツ誰だ！？」

「おつと、驚かせすみません。道に迷ってしまったので……」

「…………」から南に村があつたらしい、そこで聞けば良かつたのではないか？

「それがですねえ、僕らが着いたときには化け物どもが村を襲つていまして、気づかれてしまつたので必死で逃げてきたんですよ。」

「さうか……大変だったようだな、良ければ我々と同行させることも出来るが」

「この馬車はどうやらに向かわれているんですか？」

「ここから馬車で一日ほど行った所に町がある、そこでのギルドで我々は生計を立ててるんだ」

ほつ、ギルドか、詳しく聞かねばなるまい。

「詳しく述べてもうつても構わないでしょうか？」

「それは別に構わないがギルドのことも知らないで町に行つてどうしようと思つてたんだ？」

「いえ、実は僕たちはあの村からかなり離れた小さな集落の出身でして、この辺の常識についてはかなり疎いんです」

「そうか、では続きは馬車の中で話そう、私の仲間の紹介もしどかないとな」

なんかこのオッサン嬉しそうだな、世話を焼きなのか？まあこりひといしてはありがたいが。

「そんなことより私今回空氣だよねー」

知るか

ふあーすとーこたべと（後書き）

あんまり量が多ことモチベーションが持たないでいるのも

## チートなんて幻想（前書き）

主人公は体を鍛えまくっているので常人としてはそこそこのですが、チートということはありません。

むしろ実戦経験が非常に少ないので立ち回りが非常に雑です、素人です、力とスタミナが常人の中では優れてるだけです、ただのゴリラです。略してただゴリ

## チートなんて幻想

揺れる揺れる揺られて揺れる、馬車の中から「んにちは、小生はギルドの説明をうけています。

この世話好きのオッサンのおかげでかなりこの世界に詳しきなつた。

曰くギルドには入ると様々な物が割引される

曰くギルドに入らないと仕事は出来ません

曰くギルドに入つてやらせました

曰くギルドに入つて彼女が出来ました

まあ最後の一いつは置いといて割引は正直有難いし、先の見えない旅をするよりかはこの周辺で安全第一に働く方が建設的だろう。

世話焼きのオッサンに礼を言い、早速ギルドの受付に向かつて登録をする、受付はかわいい女性……ではなくガチムチのお兄さんだ。

「いらっしゃいませ」

「ギルド登録をしたいんですけど

「あなたはよろしくのですが……その子はどうされますか？」

「……」

そういうや小娘もいたんだっけな、影が薄いから忘れていた。

「おこ、どうするんだ？」

「んー私はさつきの冒険者的人に魔法教えてもひみつに頼んでたから別にこーよー」

こいつちやつかり弟子入りしてやがる、といつことはこれから先は正真正銘一人つてことが……フン！小娘一人いなくなつただけだ、どつと言つことは無い。

「じゃーまた会つことになつたらよろしくねー」

「飽きたらギルドに帰つて来いよ」

「それ無理かもー」

……つまり、どういふことなんだってばよ

「の人たち森の方に行つてエルフの村探すつて言つロマンチストらしこからー」

「ああ、やつ」

最早突っ込む気力すら起いらん、やつをギルド登録してしまおう。

「じゃーねー」

「精々死ぬなよ」

こんなあつさりしたお別れが実の兄弟のものとは誰も思つまい。

ギルド登録も済んだので、ひとまず装備を整えることにした。  
まず向かったのは防具屋、スタンダードに皮の鎧を買おうとして財布を見ると

「やられた」

妹の手紙と五分の一に減った所持金があつた

以下の手紙を読むにむづ私は（この町から）いないでしょう

曰く女子はお金がかかる

曰くかわいい妹のための出費だと思つて我慢してね

とのこと、ハハハこやつめ絶対に許さん地獄の果てまで追いつめてやる。

店主が小生の顔に怯えていたが気にすることなく鎧を購入。

続いて武器屋で棍棒を購入、こういうときは普通剣だらうと思つだらうがろくに訓練していない小生が持つなら棍棒が適してるだらうと直感判断である。

決して刃物が怖いわけではない、決して、だ。

さて、こういう話での定番は武器を持ったたら動きが早くなつた、魔法が普通に使える、力が常人の数倍といったようなチートだが小生には一切適用されてないようである。

ガックシだな。

## チートなんて幻想（後書き）

妹は番外編で出るかもしません、しばらく話が進んだら再開フレグが立つかも知れませんがあくまで予定は未定です。お兄さんお姉さんはそのうち出したいと思ってます

## 昇段試験（前書き）

主人公の名前を言って無いんですが深い意味はありません、ただ單に考えるのが面倒くさいだけです。

## 昇段試験

ギルドの説明をしょり、ギルドの仕事をこなしていくとランクが上がる昇段試験のようなものが受けられる。

ちなみに小生は最低ランクのFランク、小生がEランクに上がるためには必要な仕事はFランク相当のお使いミッションを五つ、それをこなした後にゴブリン討伐のミッションを受ける必要がある。

とはいっても、ゴブリンは集団行動を基本で動いているのでEランクの人のお供について狩るということになる。

ちなみにこれはEランクの人しづがつが殿をして、小生達FランクがEランクが始末し損ねたゴブリンに止めを刺す、と言つ形になる。これはEランクのDランクへの昇段でもあるのでEランクの人も一生懸命にやうざるを得ないのだ。

よく出来たシステムである。

わい、これで新たに判明した小生の特技を教えよ。

こちらの世界に来て普通に異世界人と会話が出来ることから、ひょっとしたら動物とか魔物や化け物と会話できるんじゃね?と考えたところ普通に出来たのである!

これはこの世界で生きていぐ上で大きいアドバンテージになるだろう。

というわけで小生は今、ゴブリン討伐に向かうための馬車に乗っている。同乗しているのはEランクの人達が三人、小生を入れてFランクが一人だ。

ちなみにもう一人のFランクの人は魔術師だそうだ、ついでなので魔術を教えてくれないか頼んでみたところ。

「え？ 嫌だね、どうしてもって言つなら金よこせよ、銀貨十枚な（笑）」

と、わけのわからないことを供述していたためとりあえず間接を捻つておいた。涙目で謝罪していたが知つたことではない、初対面の人にナメた口を利いた勉強代だと思つていただこう。

そういうしている間に、ゴブリンの住処に着いた。今回の住処は比較的小さいほうで、ゴブリンが十五匹程度だそうだ、早速馬車から降り、物陰に隠れる。

後ろの魔術師が恨みがましそうな目でこちらを見ているが知つたことではない、覚えてるよ… 後で痛い目にあわせてやる… 等と物騒な言葉が聞こえたので、やめてくださいよお、ゴブリンに気づかれちゃいますよお？ といしながら頸動脈を絞めながら囁いたら顔を真っ赤にして暴れていた。発情してんなよ、邪魔なのでさつさと気絶させる。

Eランクの人達がこちらに近づいてきた

「まず私達が突入するから逃げ出した奴の始末を頼む…といひでそいつはどうしたんだ？」

さつきの行動は見られてなかつたようだ、良かつた良かつた。

「ちょっと」「プリンアレルギー持ちだつたみたいですね、こいつは馬車に戻します」

「君一人で大丈夫なのか？」

「ええ、いひ見えても腕つ節と体力には自信がありますんで！」

「ああ、じゃあ我々は先に行つて来る、声をかけた時に手伝つてくれれば良い」

「死なない程度に頑張りますよ」

そつ言つとエランクの二人は苦笑しつつ巣に向かつた。

さて、こいつはここに置いといて小生も向かうとしますか。

ちなみに『ゴブリンとの会話は成立しない、前試してみたところ

『ヒヤッハー新鮮な肉だあ！』

『ヒヤツハーバーぶち殺し確定だぜえー。』

と返事が返ってきたので知的な会話は出来ないだろ?といつ結果だつた、頭が痛くなる。

と、回想に耽つていた所、早速出番が来たようだ。

『ヒヤツハーバー襲撃だあー!』

『ヒヤツハーバーいつは分が悪いぜえー!』

『ヒヤツハーバーこんな洞窟にいられるかー俺は逃げるぜえー!』

最後の奴が逃げてきたよつのので物陰から足を出して転ばせる

『ヒ…ヒヤツハーバー助けてくれえー!』

「悪いが仕事なんでな」

『ねむひづ』

棍棒で殴つて殺す、同じように逃げてきた奴らを足を引っ掛け転ばす 棍棒でトドメのコンボで一・三体始末する。

「おーい終わったぞー、そつちは大丈夫かー？」

「何とか無事です、そちらも無事で良かつた

「INの程度で苦戦してちゃロランクに上がったところですぐ死んじ  
まつや」

やはリロランクに上がるとモンスター討伐が中心になつた、そ  
うなるとやはり小隊でも組んだ方が良いんだろうか。

「まあ何にせよこれで昇段試験も終了だ、Eランク昇格おめでとう

「やぢらもロランク昇格おめでとうござります、また機会があれば  
よろしくお願ひします」

「おひ、俺はキース、んでこの無口な奴がギルだ

「……」

何か言えよ

「…良こ立ち回りだった

「見てたんですか」

「…少しだけ…な」

「えーっと…ありがとうございます」

「……うむ」

なんとも絡みづらい人だ、しかしこいつたコネは後々便利になつてくるので変な顔をしないようにしておこう。

田上の人には敬意を払つて損は無いからな。

「それで、アイツはどうあるんだ?」

「やつべ忘れてた」

キースさんが指差した先には未だにのびている魔術師（笑）がいた、  
ビリショウコレ

## 昇段試験（後書き）

相変わらず先が見えない状況です、どうじょう

## 「なんとかありこむねと（前書き）

いつか魔術師ルートとか作りたいです、飽きなければだけど。  
正規ルートは魔獣・魔物使いといつて元になります、会話できる能力  
付けちゃったしね。

## 「アハハ、ソウデスネ」

「でも、めでたくEランクになりました。」

Eランクになつたこともあり、モンスター退治のマジックを受注できるようになりました。これはもう小生の能力を使はしか無いでしょう、ビバ魔物使い、オレサマオマエマルカジリ

わざわざくミッションを探すとスライム退治のマジックがあった、「これは珍しい」

ところのものこの世界のスライムは水の精霊のような立ち位置で、わざわざスライム等と魔物のような言い方をするのは割と珍しい。ところがで依頼主の居る村に向かつた。

「それでえ～マジスライムがあアレなんつすよお～」

「……アレと言つますと？」

「あ～れえ～聞いてませんでしたあ～？いけませんよう 人の話はちゃんと聞かないとあ～ふんぶくり～ん（怒）」「

「（聞いてねーよ）……アハハ、ソウデスネ」

第一声がコレである、殴りたい。なんのこいつこんな生物と会話しているといつちまで馬鹿になつてしまつそうだ。

話を聞いたところわかつた」と

- ・スライムに「」飯をあげたんですね～
- ・そしたらあ～スラちゃんマジパネエ悪臭放つて～
- ・マジでえ～さダメよおおお　みたいなあ～？
- ・これはもうスラちゃんいらしめちやつてしま～～悪臭やめれやるしか  
ないかな～って思つたんですか～（爆）
- 「……そのHサとこいつのま何ですか？」

常識的に考えたらHサが原因だらう、それ以外に考えられない

「これですか～（涙）」

「……（生ハリかよ…）」

そりゃ臭くなるわ

とつあえず現場に向かう」とこする、同行を頼んでみたら

「臭いから～正直お断りしたい～みたいな～臭いし～

殺したい、地図渡された、何か変な染みが付いてる、死ね

現場に到着、かなり綺麗な湖なのだが周辺には何とも言えない吐き  
氣を催す臭いが立ち込めてる。

しばらく進むと泥水の塊…いや、スライム（泥）が姿を現した。

『どうひらめですか……』

声に元気が無い、顔色も悪そうだ、茶色だし。

「失礼、僕は旅人であなたの退治を頼まれたのですが……」

『えつ人間なのに私の言葉がわかるんですかー!?』

「ええ、まあ」

嬉しいのはわかるがあまり身を乗り出して来ないでほしい、臭いし。  
小生が露骨に嫌な顔をするのがわかつたようで残念そうな顔で引つ  
こんだ、罪悪感がマツハですよ奥さん。

「その…体の中にある不純物って排出できますか?」

『できないことは無いんですが…でも、ここにいるでしょ？』  
『汚すのは気が引けますし』

「ああ、それなら」

依頼主の家を指差した

「あの家にぶちまけてきたらいつでしょ？」

『それは……あの入間が困るのですが……？』

「いえ、一度、アリの海に溺れてみたいとおしゃつておられたので

『わざなんですか……やつぱり人間はよくわかりません……』

「まあ、彼がちょっと変なだけですから……」

いつかのことで仕事も解決できていライライも解消できるかもしれませんよ

『では行つてきますねー。』

「僕は様子を見ることにしてまじゅう」

じぱりくあると依頼主の家からナーロンペネーとかチョオーモー

レヅカーとか声が聞こえてきた。

「さて、僕は報酬を頂きに行きましょつか」

『あの…私を退治してないんですけどいいんですか?』

と、おずおず言つスライム(真) セツキは臭いで直視できなかつた  
が、綺麗な女性の姿をしてくる。

言つておくがいくら綺麗だからといって、向こう側が透けて見える  
よつなゼリー状の物体に欲情はしない。

「いえ、今回ほこの悪臭の原因を取り除くといつ仕事だつたのでわ  
ざわざあなたを退治する必要は無いんです。」

ぶつちやけ面倒くさいといつのもある、そいつとスライム(美)  
はひどく感激したよつで

『あなたのよつな心優しい人間がいるとは…感激しました…是非連  
れて行つてください!役に立ちますから!』

等とつとつしきりに絡んできた、うんと頷くまでこの勢いで話  
しかけてきそうだったので仕方なしに頷くと

『それでは今後ともよろしくお願ひしますー。』

と、頭を下げる。しかし、こいつがいつみゆが、このまま町に行つた  
ら懸念立つしそうだ

『それなら問題ありませんよ』

『うーん、とだ、と尋ねる前に鼻や口から入つてくるスライム（無  
味無臭）な、なこをするよりもーーー！』

『うーん、とです』

と血濡げに頭の中から声が聞こえた、こいつ小生の体に寄生しやが  
つた。

『「うーん」とあなたは田立たないし私は栄養も取れでまさこ  
ぎぶあんざいぶ、ですかー。』

「ああそつかい」

小生はげんなりしたまま依頼主の家に向かい、「まことにござ  
して、いる依頼主を引きずり上げて懐から報酬を頂いた。  
またの」「利用をお待ちしておりますってな

## スライムが仲間になりました（後書き）

スライムが仲間になりました、次回はロランク昇段試験でも受けさせようかと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9232s/>

---

引きこもりと少女の冒険譚

2011年10月9日01時28分発行